

ブータンで考えたこと

ブータンは東と北はチベット、南はバングラデシュ、西はインドに囲まれた山国です。2008年の夏に1週間ほど訪問しました。チベット人とネパール人が住んでいます。ほぼ鎖国状況が続いています。私がインドに留学していた35年程前には完全な鎖国状況で、ブータンを訪れた日本人は2~3人だけでした。京都大学から人類学の調査に行った中尾佐助、そして、JICAの派遣で農業指導をしていた西岡という人だけだったように思います。たまたま、前の国王が皇太子だった折、結婚することになりました。私が留学していたインドの大学にブータンの皇太子の妹が留学しており、日本人の留学生の女性と親しくしていました。その日本人留学生の女性が結婚式に招かれるかもしれないという話になりました。彼女にくっついてブータンに行けるかもしれないと期待したのを覚えています。そうだったら私はブータンを訪れた4人目の日本人になっていたかもしれません。訪問は実現しなかったのですが、日本の皇室がブータンの皇室と親しくしているという関係で、今の天皇陛下が皇太子時代に結婚式に行ったと記憶しています。10年ほど前に鎖国は終わったのですが、外国人の入国人数を制限しており、今でも1日の滞在費用にUS\$ 200が必要です。ガイド付きの旅行しか許されず、自由旅行は許されていません。チベット仏教寺院と山しか特に見るところのないブータンですが、政府は特定の寺院以外旅行者の立ち入りを禁止しています。お寺は地元仏教徒が参拝するためがあるので観光対象ではないというのが考え方です。ブータン政府の政策は外国の影響をできる限り排除して自国の文化を守りたいというのが指針にあると思います。しかし、制限付きの観光旅行を許しているというのは、それでも外貨は欲しいという裏事情があるためと思われる。

ブータンに着いてすぐ気がつくことは、皆が民族衣装を着ているということです。男女とも「どてら」のような服を着ています。民族衣装を残している国は少なく、特に、男が民族衣装を着ている国は稀です。私の知っている限りでは、ミャンマ以外には知りません。東南アジアでは、大昔、40年近く前にはどの国でもロンギーといって腰巻を男女とも着ていましたが、今でも着ているのは、同じく鎖国のような状況にあるミャンマだけです。自国の文化を守るために、国王の命令で皆が民族衣装を着ているそうです。車の数も少なく、もっとも、車の走れる道も限られており、車道から少し離れると歩いてしか行くことのできない村々が点在しており、公害とは無縁の国です。一日車道からほんの1キロぐらいの農家に民宿しましたが、歩きでしか行けない道を、泥だらけになって歩きました。電気も通っていませんでした。トイレも家の中にはありません。赤米を食べていましたが、充分とは言えないと思いますが、食べ物は質素ながらあり、餓死するような様子ではありません。チベットといっしょで「どぶろく」と焼酎を飲んでいます。皆満足して生きているように思えました。つい最近まで王国でしたが、今は立憲君主国になっています。ネパールでは国王を追放して民主国家になったのに対して、ブータンでは国民が王制を継続することを望んだが、国王自身がいつまでも自分が国王の地位にいると国民が自立できないと言って立憲君主国にかえたそうです。

ブータンといえばとみに有名なのがGDPです。国民総生産(GNP)に対して、国民総幸福量(GHI)が世界一というのが話題になります。外から見ている限り、国民は満足して生きているように見えます。日本も最近、レトロブームというか、古き良き昭和がブームになって、ナツメロや映画「三丁目の夕日」がヒットしていますが、ブータンでは古き良き昔を保とうとしています。考えてみると、経済発展よりも、「清く貧しく美しく」の生活の方がよかったのかもしれない。しかし、口の悪い一部のブータン人は、客観的にものを見ることのできるブータン人かもしれませんが、「外の世界を知らないから満足しているのだ」と言います。「井の中の蛙大海を知らず」かもしれません。

ブータンも桃源郷を保つのに苦労しています。隣国に大国、中国とインドがあります。道路も中国の援助で建設されていると聞きます。中国はチベットを侵略したという歴史を背負っています。北京オリンピックの折のデモ、ダライラマ亡命 50 周年と今世界で大きな話題を提供しています。インドも同じくチベット人独立国だったシッキムを侵略した歴史を背負っています。私がインドに留学していた頃、シッキムは独立国でしたが、国王を追放していつの間にかインドの一州になってしまいました。また、ネパール人に対する移民政策にも苦労しています。ネパールは人口密度が高く、国内に仕事がなく貧しいため、隣国に出稼ぎに来ています。ブータンにも道路建設の労働者として来ています。自由に滞在を許すとネパール人がどんどん流入してくると思います。また、今はインド領土ですが、住んでいる住民がインド人でない州、アッサム、ナガランド、インパールなどでインドからの独立運動がもう 50 年ほど続いており、彼ら毛沢東一派がブータンに逃げてきています。人里離れた山国でありながら、外界との接触到さらされています。

なにも、ブータンが独立を保つのに苦労しているのは今だけでなく、昔からそうです。北からチベットに侵略され続けた歴史を背負っています。しかし、近代最も大きな影響を与えたのはイギリスです。第二次世界大戦終了までこの地域はイギリスの勢力下にありました。インドがそうです、パングラデッシュがそうです、ミャンマもそうです。ブータンも例にもれず、博物館に行くとブータン皇室と一緒に写っているイギリス人の写真があり、イギリスの影響を感じることができます。アッサム、ナガランド、インパールなどで独立運動が 50 年以上続いているというのも、第二次世界大戦終了まで植民地支配していたイギリスがインドに支配権を与えて撤退したためです。この地域の原住民からするとにもインド人に支配されるいわれはないはずですが、ブータンという国名もイギリス人がつけたものです。ブータン人は「ドルック」(龍)と自分たちの国を呼んでおり、ブータンは多数派であるブータン族から取った名前です。昔から、桃源郷を保つのは難しいことだったと思います。力の強い者が弱い者を支配するというのは人間の長い歴史の流れかもしれません。今ブータンが自国の文化をかるうじて守っているというのも、植民地主義の時代が終わり、民主主義の時代になり、力の強い国が勝手に弱い国を侵略できなくなったためかもしれません。このように考えると、歴史の歩みをとどめて生きていくのは困難だと思えます。

最後に、人間というものは一旦習慣になった嗜好品を抜け出すのが難しいことを示す一例があります。ブータンは禁煙の国になっています。国王が喫煙は身体に悪いだけで何の益もないということで、国民の健康を考えて禁煙を決めました。喫煙しているのが分かったら罰金刑になるそうです。しかし、皆おおっぴらに吸っています。私のガイドも若いのにタバコ吸いで、私ももらって吸っていました。どこから手に入れるのだと聞くと、インド国境から闇で入ってくるのだとか。国王を皆信頼して尊敬していますが、国王もタバコには勝てないみたいです。また、ボルネオ島にブルネイという小さな国があります。王国ですが、石油が取れるおかげで豊かで納税の義務のない国です。イスラム教を国教にして、禁酒を守っています。国内では一軒も飲み屋はないし、酒も売っていません。ところが、小国なので隣の国、マレーシアまでは車ですぐです。私は 20 年ほど前マレーシアからブルネイに入ったのですが、マレーシア側の国境の町には飲み屋が乱立しているのに驚いた記憶があります。ブルネイ人の飲み助は週末になると酒を飲みに国境を越えて来るのです。神様も酒には勝てないみたいです。人間は嗜好品には弱いものです。